

廓（くるわ）

西口克己著

三一新書

廊（くるわ）

価 170 円

1956 年 4 月 10 日第六版発行

著 者 西 口 克 己

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 内外印刷株式会社

製 本 所 新生製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

京都市左京区北白川西平井町24

振替 京 都 6 4 0 3 番

東京都千代田区神保町 1 の 4

落丁・乱丁はおとりかえいたします

三一新書 25

廓
(くるわ)

第一部

西口克己著

目次

第一章.....	五
----------	---

粉雪
日蔭露路
自棄酒

玉下見
店開き

第二章.....	五八
----------	----

水揚げ
足抜き
ごろつき

救世軍
殴りこみ

第三章.....	一〇二
----------	-----

私刑
身替り
女郎腹

豚箱
若狭で

第四章……………一六

恋文 談判 金策
弁天寺 釈放

第五章……………二五

短冊窓 千客万来 かがり火船
水車 鬼

附 録（資料）……………二七〇

あとがき……………二七七

第一章

粉雪

明治三十九年——日露戦争の翌年、寒さのきびしい冬の最中のことだった。

京の底冷えというが、その底冷えが崩れてチラチラと白い粉雪になった日暮れどき、伏見の町の中書島という廓の中へ、二人づれの見すばらしい男女が入って来た。

宿場ふうに京格子を構えて、廂を並べた女郎屋の軒行燈にはすでに灯が入り、その行燈の傍の暖簾の蔭には、どの店先にも引手婆達が小さな鞍掛にチヨコンと坐つ

て、狐のように油断のない目を光らせていた。昔ながらの縁起をかついで、鬨の両隅へ一つまみの盛塩を置いた後は、こうして一晚中、客を手招き引張るのが役目なのだ。だが当時この廓は、維新このかた土地の利を失ったせいもあって、すっかり寂びれきっていた。で、客探がしに必死な婆達の目に、この二人の姿が忽ち捉えられたのもむりはなかった。

男の齡は三十歳位、怒肩の中背で、猛牛のように逞しい体格だが、この雪のチラつく寒中に粗末な厚司を一枚着たきりで、兵児帯の結び目を腰の横へチヨンと刎ね、素足に石裏草履を穿いている。おまけに、何かの拍子にグツと行燈に近寄ったとき照し出された顔が普通ではない。いかにも短気者らしく寸の詰った険しい額、骨ごと押潰されたような平たい鼻、その両側にやゝ離れて一文字に凝と底光りしている目、さらに頬から顎にかけて一面に苔のように密生した黒い無精鬚——つまり伝説の鐘馗を若作りに、だがうんと醜くしたような顔だった。ところで、この男にピッタリと寄添うて歩いている女というのは二十六、七歳、型の崩れた丸髻姿に地味な綿入羽

織、両手に大きな風呂敷包を抱えているのだが、そのひどい世帯やつれにもかゝらず、これはまた男とは凡そ不似合な、夜目にもそれと判る匂うばかりの色白な経織よしだった。

じっと見送っている婆達を知ってか知らいでか、男の挙動というのがまた薄気味の悪いものだった。というのは歩いて行く途中、ときおり男はヒョイと立留って、わざと行燈の灯の届かぬ物蔭に佇みながら、目の前の女郎屋の建物や店構えなどを、何か物色でもするかのようにジロジロと眺め廻すのだ。かとおもうと、伴れの女を振向いて何やら低声で囁き合いながら、何喰わぬ様子で再びスタスタと歩きだすのである。

「なんやろ、あの二人。気味のわるい——」

「さあねえ、世間がこう不景気やと、いろんな化物が出て来るわいな、ひっひっひ。」

引手婆達が浴びせたこの蔭口も一理あった。むろん二人は堅気の夫婦者とは見立てられなかったのだ。堅気者ならこの界隈をこんな時刻に、こんな真似をしながらうろつくわけがない。さりとて玄人の紹介人が身売女を伴

れて乗込んで来たものとすれば厚司婆など以てのほか、粋な氣流しか流行の二重廻し姿で、手指にはこれ見よがしに金蒲鉾の一つも光っているというものだ。で、結局、不景気な世間を極道で喰いつめて、内縁の情婦に因果を含め、何とか金銭にしように伴れ込んだ白樂半分の道行き姿と値踏みされてしまったのだ。そういえば男が物蔭で佇んだのは、どの店で女を捌こうかと思案したのだと受取って取れぬこともなかった。

何れにしても、不景気のドン底の廓の中で、相手の懐に僅かでも金銭があると睨めば、それが男であるかぎり泥棒であろうと瘡掻きであろうと金輪際袖を提えて放さない引手婆達からさえ、渾一つ引掛けられなかったというのが、そのときの二人の姿だった。

だがこの完全な文無しと見下げられた筈の二人は、そのまゝ廓の中を一廻りしただけで、どの女郎屋の店へ首を突込むでもなく、最初に足を踏入れたとき故意に素通りした一軒の古ぼけた居酒屋の前まで戻って来ると、男の方がその油障子をガラリと開けて、

「叔父やん——鰐口貫太、女房のお銀を伴れて、とう

とう厄介になりに来ましたで。」

と、低い声で案内を乞うたのである。

腰高な油障子の右側には世間並に、酒、肴、一膳めしと大書されていた。だがその左の一枚がいさゝか変っていた。真新しく張替えたと覺しい一劃に跳るような筆勢で黒々と、西南役廃兵、山田勢五郎改め宝来亭主人と誌されていたのだ。

「おう貫やんか、わっはっはっはっ——この死損いの極道者め、まあ上がれ。」

客ならぬ亭主自ら空樽に腰を据えて茶碗酒をあふつていたが、入って来た二人の姿を大きな目玉でギロリと睨むなり勢五郎は、こう一喝したものだ。

久振りの対面だった。叔父といつても、この勢五郎は顔立ちを一見しても判るように、お銀の叔父なのだ。どうせこの雪では今夜は客らしい客もあるまいと小婢に命じて店を早仕舞させた彼は、奥の狭い居室へ二人を招じ入れ、改めて酒盛の支度をした。車坐の真中に据えた七輪の鍋の中で、やがて青葱や豆腐と共に、薄赤い肉がグ

ツグツと温かい湯氣を立て、煮え始めた。

「この家鴨は儂が夕方到手ずから絞めたんや。はっはっ、安心して喰え。」

ひとしきり盃を重ねた後、何を思つてか裏の川に面した障子一枚、ガラリと片手で開けた勢五郎は太い指で外の方を指さしながらいった。

「伏見の町も寂びれたもんや。維新前後には、この川の流れへ有名な三十石舟が賑々しく漕付けて来たものや。そうなが、今では儂の手飼の家鴨めが浮いとるだけじゃ。ふっふっふっ——」

暗い川面に粉雪がチラついては消えて行くのが仄白く見えた。開かれた障子越しのすぐ左手に、この廊へ客を誘う宝来橋が夜目にも黒々と覆被さつて伸びている。その橋桁の下からチラと遠くに灯が見えるのは、川向うの有名な船宿寺田屋の軒行燈でもあるのか。そういえば暮方二人が渡つたこの宝来橋にしても、勢五郎が橋畔の自分の店の屋号をその名に因んだ頃に較べて、廊好みに塗上げられた欄干の紅殻もすでに色褪せ、橋桁さえも所々朽ちかゝつて危いありさまだった。かつては粹な爪弾

きの洩れる雪見の屋形舟をつないだその橋杭の一隅に、彼が古板を繕合せて薄汚ない家鴨小屋を作っても、今更誰も苦情をいう者はなかったのだ。

差しつ差されつの酒盛は夜更けまでもつづいた。其間の勢五郎の問わず語りによると、伏見の町外れにあるこの中書島という島の歴史はかなり古いものだった。豊臣時代、すでに某大名がこゝに下屋敷を構えていたが、その後は永いあいだ荒果て、蓬々と葦の茂った廢島になっていたという。ところが徳川中期、漸く淀川筋の舟便が賑い始めるにつれ、抜目のない土地の顔役達が伏見奉行に取入り、目先に船着場を控えたこの島の中へ近在の色町を一まとめにして移したのが、この廓の起りだった。元禄十三年のことだ。以来この廓は幕府公認の全国廿七廓の一つとして賑いつづけ、維新に至った。

だが、座敷の戸障子を叩破られ畳を血で汚された寺田屋騒動を始めとして、数知れぬ民家を焼払った鳥羽・伏見の戦の砲煙が薄らいで行くにつれ、この土地に残されたものは、一口にいえば宿命的に地の利を失った伏見の町そのもの、衰微した姿だけだった。確に明治維新は天

皇政府を作上げ、江戸を東京に変え、国中から武士というものを一掃した。とはいえ、それは下々の者の、相も変らず苦しい暮向きの前だけは、頬被りのまゝ、素通りして行ってしまったのだ。下積みは昔のまゝだった。勢五郎の云草ではないが、三十石舟のあとに家鴨が浮き、欄干の紅殻が剝げ落ちたまゝ、この川の流れに囲まれた廓は何のこともなく取残され、夜な夜な薄暗い行燈の灯を軒毎につらねていた。いゝかえれば、明治五年の、俗に牛馬の切解きとして騒がれた有名な人身売買禁止令も、三十三年の娼妓の自由廢業を認めた取締法規も、すべて一片の空文と化し、貧苦に追詰められてこの廓の中へ身売りされて来る哀れな女達をどうすることも出来ない始末だったのだ。

「それにしても、あの寺田屋の亡くなった女將は立派な方じゃった。例の西南の役で片輪にされた儂が半ば自棄糞で近衛軍曹の肩書を隠して、誰一人見知った者もないこの伏見の町へ跛をひきひきやって来たとき、儂と儂の顔を見ただけで、読み書きが出来ると聞いて、ろくに身許調べもせず宿の帳場に拾上げて下さった。ずっ

と後で何かの拍子に沁々といわれたもんやが、勢さん、お前はいつも自分のことを牛の骨とか馬の骨とか、やれ跛の片輪者とか、しきりに僻んだ呼方をしてゐるが、お前のその太腿の古創が何年位前の、しかも鉄砲創やちうことくらい判らんようでは寺田屋の女将は勤まらへんのやえ、それに、お前の書く字は子曰くの士族が書く字で、口の利き方とはあべこべに実に几張面に四角張ってるやないか、あたいは字のことはよく判らんけど、そういう人に悪人は少いちうことだけは判るつもりやえ、とな。これには僕も一本参ったもんや。また、こうもいわれた、けんどね勢さん、そういう正直者が軀を投出して御国のために尽すような時代はもう済んでしもうた、あれは大きな夢やったんや、これからは何ちうても金銭が物いう世の中、お前も昔の夢はきっぱり捨て、町人に生れ替ったつもりで一から出直すこっちゃ、とな。その女将が亡くなったのは、忘れもせん明治十八年のことじゃった。恥しい話やが、そのとき僕は何とこの涙が出たもんや。なあ、考えてもみろ、維新の際、なんぼ武士やからちうても、あの寺田屋の畳を土足で踏みちらし

た名もない手合いが今では大きな邸に住んでソリクリ反って官員風を吹かせているというのに、あの当時、何度も生命の縮むような目に遭わされ、有名な坂本竜馬と大事な手紙のやりとりまでした女将の其後はどうじゃった。町人の、しかも女の分際でといえればそれまでやが、相も変らぬ宿屋の女将で、鉄道が開通してあの船着場が寂びれて行くにつれ、毎日々々苦しい算盤を弾じきつづけ、愚痴一ついわず、とうとう影のように寂しく死んで行かれた。今にして思えば、あのとき僕に向つて、あれは大きな夢やったんやといわれたのが、たった一つの愚痴といえは愚痴ではなかったか——この気持は、西南ノ役で廃兵にされたこの僕にだけはハッキリと判るのじや。實際、嗤う奴は嗤えじや。葬式の列に加わつて、いかにも町内の顔役らしく立派な黒紋付に袴穿きで、顔だけは愁傷らしく伏せて歩いている奴らは、そのじつ寺田屋に立替えた僅かばかりの貸金を昨日の際までガミガミと呟鳴り立て、催促していた手合いなんや。奴らには、それこそ恩も義理もあつたもんやない。二言目には金銭、金銭や。奴らだけやない。葬式を見送っている連中

にしても、仏が生前どんな人やったということよりも、今目の前を通って行く葬列の長さを測って、あれこれとその家の財産を値踏みするような、そういう世の中になつて来たんじゃないや——ふっふっふっ、のう貫やん、明治という御治世は二度も大きな戦争に勝って、まことに結構な有難い御治世やと皆はいうが、なあに嘘じゃよ、まるで嘘っぱちじゃ。……」

勢五郎が、久振りに氣のおけない飲み相手を前にして喋るだけ喋ってから、雷のような鼾をかいて寝てしまった後、勝手の判らない家の皿小鉢の後片付に案外手間取った二人が、自分達に当てがわれた二階の一室へ古階段を軋ませながら上って行ったのは、もう真夜中近い頃だった。六十歳にもなりながら片輪者らしく独身で押通している叔父の家のことゝて、二階は恐しく埃臭く汚れていた。貫太が、運んで来た洋燈の芯を掻立て、いる間に、お銀は押入を開けて手早く床を取った。冷たく微臭い煎餅蒲団だった。隙間風を防ぐために枕許へ、錦絵を貼った破れ屏風を立てた彼女は、旅の疲れと酒の酔とにグツタリとなつて、夫への挨拶もそこそこに床の中へ潜

り込んだ。風邪気味で頭が割れるように痛んだが、よほど疲れていたとみえ、それでも二、三度寝返りを打つ間に、深い寝息を立て、泥のような眠りの中へ落ちて行つたのだった。

仄明るい洋燈の灯に斜めに照らされた彼女の青白い寝顔を、突立ったまま、凝と見下していた貫太は、やがて酒臭い呼吸をフーッと吐きながら傍の畳の上へゆっくりと胡坐をかいて坐りこんだ。と、その影が背後の煤けた壁面に、途方もなく大きな黒い化物か何かのようにユラユラと揺れながら、同じく坐りこむのだった。普段から丈夫でない彼女に較べて、岩のように頑健な彼の軀にも、さすがに火の氣のない部屋の真夜中の寒気はこたえた。何かバリバリと目に見えぬ鱗でも捲り取られて行くような烈しい酔覚めの仕方だった。

「何事も金銭が物いう世の中か、ふっふっふっ——」吐出すように呟きながら、何と思つたのか貫太は、やにわに厚司の胸をグイと開くと、懷から驚づかみにズルズルと薄汚れた晒の胴巻を曳きずり出した。勿論ズシリと重味があるわけではなく、いわば褌の切端にも似た

その布を膝の上に置いて、しばらく指の先で盲目探りに探っていた彼は、やがてニヤリと薄笑いを浮べながら用心深く片手を突込んで、目的の物を静かに取出した。それは薄っぺらな小さい四角の塵紙の包だった。まるで大切な御守札でも開くように骨太い指先を微かにふるわせながら、貫太はその包をゆっくりと開いて行った——と、そこには一目でそれと判る手垢に汚れた百円札が三枚、折畳まれたまゝポロリと出て来たのだった。洋燈の明りにかざしながら、彼はその僅か三枚の札の指ざわりを味わうかのように、一枚また一枚と繰返し丹念に勘定するのだった。

当時、三百円といえ、どれくらいの値打のものだったか。大ざっぱに言って米一升が九錢、巡査の月給が拾円といった時代だったから、これは相当にまとまった金高に違いはなかった。貫太にしても、引手婆達から文無しと踏まれた風体をしなから、これだけの金銭を胴巻の中に隠し持つについては、ギリギリ一杯の無理算段をした上でのことだった。後にも述べるように、前の商売に見切りをつけて店を始末したとき、事の序でに家財道具

から衣裳から、女房の鼈甲の筭に至るまで、それこそいざらいに叩売って作った金銭なのだ。

「えゝか、この金銭は月給取りが貯めた金銭とはわけが違ふんやぞ。商売人の使う資本という金銭や。なんぼ腹が空いても、米や味噌を買うためにこの金銭をガラダラと内輪に喰込んで行くことはな、大工が道具箱の中から鉋や鋸を一挺々々喰いするのと同じことになるんやぞ。俺は自棄酒をやめて、これからもう一ぺん商売人に還るぞ。それも並の商売人やない、極道という筋金入りの商売人にな、ふっふっふ——」

知らぬ土地へ行くのに厚司一枚ではあまり見苦しいやないのという女房を、こんなふうに叱りつけたものだった。

三枚の百円札を握ったまゝ、叔父の家の暗く低い天井板を凝と底光りする目で睨みつけて、しばらく回想に耽っていた貫太は、やがてまた糞町噺にその札を元の胴巻の中へ隠してから、のっそりと寝支度に立上った。寝支度といっても簡単なものだ。手早く兵児帯を解いて例の厚司を脱捨て、さらにその下に着ていた唯一枚のメリヤ

スの襦衣までもさっさと脱いで猿股一つの真裸になったかとおもうと、酔覚めの寒さを弾じき飛ばすように左右の腕を勢よく振廻しながら、脱捨てた衣類を素早く枕許に置き、そのまゝ寝巻も着ずにゴソゴソと一つ蒲団のお銀の横へ入りこんだのだった。寒中も糸瓜もない。裸で寝るのが俺の身上だという彼の自慢の一つなのだ。片手を伸ばして胴巻を枕の下に敷き、ふっ、と洋燈の灯を消した。

「叔父貴が伏見へ流れこんだときは、あの跛の軀で、おまけに文無しやったんや。寺田屋に拾われたとはいえ、それでもどうやら寝酒をあふるこの時だけは手に入れたやないか。とすればこの俺がこれだけの金銭を資本にして、この中書島という地獄みたいな貧乏廓で一旗挙げて挙がらぬ道理がない。ふっふっふっ、まあ見ていやがれ。……」

日蔭露路

雪融けの泥濘がコチコチに凍てついて、底冷えのする日がまた何日かつづいた。

女郎屋の板壁に両側を挟まれて、界限では誰いうとなく日蔭露路と呼慣わしている狭苦しい陰気な露路の、朽ちかゝった泥溝板を踏鳴らしながら、一人の男が突当りの家の格子戸をガラリと開けて中へ姿を消した。

「おい、お寅ア——ちえッ、また二階か。さっさと降りて来い。」

「あいよ、お帰り。」

二言三言、何やら罵るような捨て台詞を残して、トントンと階段を鳴らしながら四十がらみの白粉焼けた女が降りて来て男を迎えた。

この日蔭露路の奥には、この家の他に四、五軒の、今

にも廂の崩れ落ちそうな小さな棟割長屋が、唯一つの井戸を前にして並んでいた。家主は表通りの女郎屋で、住んでいる店子といえは引手婆、下駄の齒直し、羅宇仕替屋など、何れも皆廓のコボレ錢で其日々々を細ぼそと暮している手合いばかりだった。その中でも、この突当りの一軒だけはやゝ小綺麗な二階建て、入口の格子戸の傍には大きな木札に、芸娼妓紹介人 徳屋久作 と書いた看板が釘付けに吊下げてあった。同じ廓を飯の種にしなからも懐工合のいゝのも道理で、この看板は彼が警察公認の女衞だということを示していた。

「何や、あの娘、まだ小便臭い世迷言をぬかしてけるのか。」

上框に突立って、顎で二階をしゃくり上げながら不気嫌そうに訊ねる亭主の顔色を窺いながら、女房のお寅が答えた。

「そうやがな。何かちうたら二言目にはメソメソ泣いてばかり、わてもあんな往生際の悪い娘を扱うのは初めてや。しまいには此方も疳が立って来て、つい今も頬つぺたを一つイヤちうほど抓ってやったンやがな。」

「ふん、抓るもえゝが、後に痣を残すなよ。今日の聞込みでは、どうやら捌きがつきそうやでな。よし、俺が一つ絞めてみてやる。それからな、まもなく芳三の奴がおタケをつれて来る手筈になつてゐるよつて、来たら階下に待たしとくんやぞ。」

「あいよ。」

みしり、みしりと階段を上って、ガラリと襖を開いて立塞がったときの、この徳屋という男の顔を見て慄としない女は未だかつてこの二階では一人もなかった。案の定、それまで畳に突伏して鳴咽していた一人の小柄な、小麦色の肌をした娘が、人の氣配にチラと此方を振仰ぐや否や、まるで電氣にでも撃たれたかのようにハッと軀を硬ばらせて固唾を呑んだ。

徳屋の顔は俗にいう白痘痕だった。それも尋常一様の痘痕ではない。世にも無残にササくれ立って、顔一而あたかも白蛇の鱗でもチリばめたように粘々と光っていた。おまけに彼の二つの眼は、この氣持の悪い顔にふさわしく、凝と娘を見下したまゝ冬眠でもしているように瞬き一つしないのだ。

「おい、別嬪——気分はどないや。ふっふっふっ、そう可怕がるない。」

その鳥肌立つような冷たい調子に、おもわず坐ったまゝ後卻りする娘の着物の裾を、ギョッと片足で踏んで釘付けにした彼は、突立ったまゝ、やおら懷から一綴りの書類を取出して相手の鼻先へ突付けた。

「お前、この証文に覚えがないとは、いわさんで。」

恐怖のために大きく見開かれた彼女の目は、ありありとそこに石崎キクノという自分の名を読取った。その横には淡墨の歪んだ字で石崎三吉という父親の名もあった。その下にはベツタリと印判が捺してある。確に彼女はこの書類に見覚えがあった。彼女が国許でまだ病気の父親を介抱していた頃、近所のお熊婆さんが来て、二人の手を取らんばかりにして書かせたものだ。

「えゝか、これアレつきとした借金証文やで。恐れながら、と出るところへ出ればハッキリ物をいう証文や。お前のお父つあんは、この証文を一札入れて、この俺から百両という大金を借りたんやで。誰がお前を伴れに行つたかは別として、とにかく貸主はこの俺や。お父つあ

んは金錢を返すアテがない。そやからお前が働いて返す——当前やないか。高い汽車賃をかけてノコノコと出て来ておきながら、この上まだ文句があるのかい。」

「——」

「それともな、あくまで厭というなら厭でもえゝんやで。俺ア、お寅と違うて、お前の頬ぺたを抓るような真似はせえへんで。そのかわり、今夜にでも人をやつて、お前のお父つあんに貸した金錢を返して貰うまでや。なんぼ病人やいうても、こいつア立派な詐欺罪や。下手すりゃ手が後に廻るで。俺も伊達や酔興で百両という大金を貸したんやない。そうなりやトコトンまで取立てるで。時と場合によつては、病人の粥を炊く行平まで売飛ばしてやる。お前の娘が、それでも構わんいうとるんや、とな。ふっふっ——」

彼女の父親は北陸地方の小さな町で鉄道の踏切番をしていたが、一年前の吹雪の夜、駅の構内でふとした不注意から貨車に挟まれて片手を失くし、僅かな手当金でお払箱になってしまったのだ。それのみでなく、日が経つにつれて其時の打身が悪くコジれて慢性の神経痛とな

り、遂には足腰の立たぬ病人として蒲団の中で暮す状態になつてしまつた。肝心の働き手を失つた家の中には、十八になつたキクノを頭に五人もの幼い子供達があり、しかも末の二人は腹違いの弟妹だつた。継母とはいえず、つて人の好い母親の懸命な賃仕事や、年嵩の子供達の物売り位では到底支えられる家計ではなく、父親の介抱役に子守奉公先から呼戻されたキクノの代りに、次々と二人の妹達が奉公に出された。それでもなお、今もありありと想出すのだが、裏長屋の僅か二部屋しかない赤茶けたボロ畳の上にゴロゴロと転がって空腹を訴えながら泣きわめく小さな弟や妹、その泣声に疳を立てる元氣すらなく、そつと顔をそむけて涙を拭く父親——丁度そんなときに、お熊婆さんが訪れたのだ。町の医者の話では、高い舶来の薬を飲んで、ウンと滋養物さえ食べれば父の足腰は必ず立つと請合つたということ、どっちにしてもこのまゝでは一家心中の他はないから此際思切つてキクノを働きに出せということ、紡績や女中奉公では収入も少しいし前借金も雀の涙ほどしか出来ぬということ、酒を飲む客の相手をすればいい、ただ、ひよつとすれば客の

中の若い男に可愛がられるかも知れぬということ、けれども娘さんも、もう子供じゃあるまいし少々の辛いこと位は辛抱しておれば、そのうちには馴れてしまうということ、本人さえその決心がつくなら責任を以て百円位は借りてあげるということ——ほう、百両もな、と継母が目を見くしたのを彼女はハッキリと憶えている。とにかく、この金高には母親ならずとも彼女自身、おもわず胸をトキめかせたものだつた。生れてからまだ一度も見たことない百円という沢山の金銭！それだけあれば父の病氣も癒るし、弟や妹にウンと腹一杯食べさせて綺麗に着物も買つてやれる——彼女はふと期待に充ちた目で、傍に寝ている父を見返つたのだが、意外にもそのとき、父はわざと彼女の目を避けて弱々しく頭を振りながら壁の方を向いてしまつたのだつた。

結局、その日は、考えさせてくれと答を渡つた父に抗らいもせず、帰つて行つたお熊婆さんは、だがそれから再三何かと口実を設けては押掛けて来るようになった。来る度に幼い弟や妹に焼芋や飴をあたえ、彼女に向つては、その勤めというものが世間でいうほど辛いものでは